



星装少女
ユニゾン
ソユエル

汚辱にまみれた紺色の旋律

小説 神楽陽子 挿絵 緑木邑

立ち読み版

Round 1 金色のユニゾンと緋あかい狂気

Round 2 屈辱の便器フォーム

Round 3 白濁のファンサービス

Round 4 幼馴染レイプの絶頂体験

Round 5 二匹の牝チンポマイスター

Epilogue

006

051

096

149

194

253

登場人物紹介

Characters



みその かりん
美園 香凛 /
ユニゾンカラット

ノータンキなムードメーカーで、どんな星魔とさえ仲良くなれる女の子。とことん甘党。星魔クンツァイテの力を借り、ユニゾンカラットに変身する。

たかみね あんじゅ
高峰 杏樹 /
ユニゾンジュエル

ヨーロッパ留学帰りの優等生。幼馴染である香凛への面倒見はよいものの、友達付き合いは苦手。星魔ユーディルの力を借り、ユニゾンジュエルに変身する。

ロゼッティ＝
ラッハシュタイン

杏樹が留学先のヨーロッパで出会った少女。杏樹とは親友になるが、ある事件で行方不明となる。しかしその後、杏樹の前にユニゾンマイスターとして現れ…。

(本当にローゼが、こんなことに……)

現実なのだ。孤独な親友が男どもに犯され、さらにペニスを握らされ、目の前の一本をしゃぶらされているのは、どれも実際にローゼが体験したこと。

彼女のために何もしやれなかった自責の念に押しつぶされそうになる。

「ひああぐ、ろめ……ごめんはない、はあ、ローゼ……えおおあつ、もお許して！」

肉体の甘い快楽は心の慰めとなり、ぐちゃぐちゃの感触で頭を紛らわせてくれた。牝穴が淫液を吐き出し、陵辱者の凶器を潤わせる。

スクール水着の中でも触手が巡回し、粘っこい体液を隅々まで行き渡らせた。薄生地のでいで液が絡まりやすく、淫猥なぬるつきにまとわりつかれる。

「や、やめへ！ んぐう、ろおにか、ええぶ！ どうかかなっひやう！」

ぬかるんだ肉穴は極太で食い荒らされ、摩擦は奥まで確実に届いた。粘膜襲がサオの全体を包みながら、雁首の移動に追いつがる。

あたかも杏樹の穴のほうが咀嚼しているような粘音が鳴りまくった。ついさつきまで処女だった狭さが男性の太さを啜え込み、涎みたいな蜜液を溢れさせる。

膣の吸いつく動きに自覚はあっても、肉体が我慢してくれない。

ヌチュヌチャッ、グチャ！ ヌチュヌチュヌチュ！

下のおくちで食べる、という未知の感覚に痺れる一方だ。空腹感と似て非なるものが子宮で生じ、そこまで異物を送り込みたくなってしまう。

「あおうむ！　へあつあひゆ、んぢゆ！　んれえろつ、ン、はあおぐ」

麗しいツインテールを醜い触手に引きずられながら、セーラー戦士は無意識のうちに異臭に酔った。リズムに乗った腰つきで巨乳を弾ませ、不気味な触手の波と戯れる。

手で扱かせている二本が、ジュエルの鼻先で尿臭い亀頭を集めた。瞳をどちらに転がしても、興奮状態の雁太に焦点が合う。

「もう出ちまいそうだ、ハア！　こいつはすげえ、チンポ扱く才能あるぜ！」

「近づけないれ、ひぐ、くさひ……んぐつ、えつあぶあ！」

同時に真正面の肉太をしゃぶらされ、呼吸を妨げられた。みつともない鼻水で美貌を台無しにすると、げらげらと嘲笑される。

「きたねえカオだ！　いいぜ、ぎやははは！」

「だれのせいでつ、こんな、んあえぶ？　はぢゆつ、れおおえ」

悔しさを怒りに変えたつもりでも、眉を吊り上げることすらできない。

ここはチンポの牢獄だ。ヌヴィエム機関はユニゾンマイスターの能力強化を建前として、性便器を作っていたのだろう。普通の少女なら大怪我になりかねない乱暴でも、ユニゾンマイスターの屈強な肉体であれば耐えることができてしまう。

下半身の刺激が足りなくなると、ジュエルの腰は勝手にのけぞり、催促した。

グチャツグチャ！　ズチャツ！　ズチャズチャズチャ！

「あああん！　らめつ、もおわたし……えぐう、おかひぐ、ンツ、さへひやうう！」

双乳の上では触手がとぐろを巻き、豊かな弾力を弄ぶ。ピンビンの小突起が弱点であることはすでに知られ、小刻みに擦りたてられる。

むっちりとした太腿に執着する数本もずぶ濡れの肉穴に入りたがった。合わせ目ではクリトリスがしこり、疼きを堪えきれない。

「ひはっああ？　そ、そこ……へあふつ、んぶ、おおあむ！」

肉太をしゃぶっていないと、唇から甘い声が溢れてしまいそうだ。懸命に唇を窄め、乱暴な雁太を舌で押し返す。

握って扱っている二本が、杏樹の頬に先端をぐにりと押しつけた。牡のにおいが一段と濃厚になり、呼吸器官を犯し尽くす。それ以外の、無臭の呼吸は許されない。

お尻にも触手は殺到し、薄生地の中を泳いだ。

「そこばかり、えあはっ、あうむ！　ぬるぬるつてさせないで！」

股座またぐらをくぐって水抜き穴からはみ出し、ほかの触手と入れ替わる。おぞましくも撫でるような動きが、昂りすぎた肉体にはもどかしかった。

手が届くなら弄っているかもしれないところへ、ペニスと触手が同時に飛び込む。

グチャッ！　又チュツズチュリ！　グチュツ、グチュグチュグチュ！

男根の硬さと触手のしなやかさが、ピストンの緩急を大きくした。狂おしい痺れが股関節を経て、脚の爪先にも達する。

「はあっ、んぐ、んぶあは！　い、息がでひな……うえおお？」

「もつとしゃぶれ！ 心を込めて、ハア、いいぞ、すぐ出してやる！」

おさげを掴みあげられ、フェラチオを強要されながら、美少女マイスターは下の世話に没頭した。窮屈な腔穴はなお穿り返され、ひりつくほどに掂げられる。

子宮の脈動はだんだん位置がさがり、怒張とぶつかりやすくなった。そこで生じた痺れが強すぎて、手足をがくがくさせると、両手のペニスをしっかりと握らされる。

「続ける！ 任務を忘れてんじやねえよ、ハアッ、このエロチンポマイスターが！」
嫌でも男性の喜ばせ方がわかってしまい、杏樹は器用に手首を返した。サオをきつめに摩擦しつつ、張り出たエラを指でくすぐる。

同時に吸い上手な唇は肉太を深めに頬張り、舌を旋回させた。

「うぐおむ……まいひゆたーは、えお、こんなことしゆるために、いるわけじゃ……」
ユニゾンマイスターの存在意義まで侮辱され、悔しい。しかし上気しきった顔は惚けてしまい、心ならずも悩殺的な上目使いになっていた。寶石色の瞳に熱い涙が滲む。

『たすけへ……アンジュ、えあつぷ、たすけへよおお！』

母親を捜す迷子のような声も頭の中に響き渡り、杏樹をさらに責め立てた。陵辱が罰として、杏樹にとつても正当化されてしまい、抵抗する気が起きなくなる。

「ろめんなさひ、あむつ、ローゼ……ほんろおに、えおぐ、ごめ、ツおええお！」

そして罰にもかかわらず、淫らに感じてしまっていることが浅ましく思えた。オナニーが気持ちよすぎて止まらなくなるように、これみよがしに腰を振る。

「たまにいらんだよな、ハハッ、こういうチンポ狂が！」

大股を広げて悦がり狂うユニゾンマイスターの、はしたなくてみっともないチンポダンスだ。なのに便器の仕事をやめられない。

欲張りな便器穴はひっきりなしにペニスをしゃぶり、女蜜を白濁させた。液のぬるつきが潤滑油となり、狭いなりに肉太を奥まで連れ込む。

「もおらめ、いつ、えあはあ！ イっひやう、あんっ、イカされるの！」

同じく男性をしゃぶる唇も涎をたたえ、気丈なはずの瞳は本能的な酔いで満たされつつあった。キモチイイ——という錯覚が、脳裏のすぐ後ろまで忍び寄ってくる。

悶絶するユニゾンジュエルと呼応し、触手たちもぶるぶると震えた。ペニスと同じ形の亀頭が膨張しすぎて、鈴口がぱっくりと割れる。

「これいじよおはっ、あえぶ、らめ！ あひい、くるっ、すごいきひやうからあ！」

雄々しい硬さを子宮に何回も打ち込まれ、膣の全体がびりびりと痺れた。歯軋りもできない状態では臨界を食い止められず、敏感な肉体がどんどん過熱する。

びしょ濡れのスクール水着はあちこちで触手を泳がせていた。ピストンに合わせて弾む巨乳には、杏樹の涎もでたらめに滴り落ちる。

触手は苛烈な膣圧を巧みにくぐり抜け、子宮孔をこじ開けた。

「ゆるしてっ、んへあ、ああぶ！ ンンッ！ もおいや、オチンチンやめてえ！ とまんないの、イクのが、びりびりっ！ あっえ、んあぐう！」

みるみる締まりがなくなり、呂律もまわらない。

肉洞は触手を引きずり込みつつ収斂し、合わせ目で熱い飛沫を散らした。

ブシューウウウウウウウウウウ！

潮噴きをもろに浴びせられた触手たちが、びくびくとこのたち、ジュエル目掛けて一斉に汚濁をぶちまける。握り締めた二本は顔面との距離が近い。

ドビュビュッ！ ビュルル！ ビュルビュルビュル！

目の前でいくつもの放物線が飛び交い、杏樹の視界を入れ替えた。

「おらっ出すぞ！ ハアハア、こっち向け、ご褒美のチンポミルクだ！」

「すげえ締まりやがる！ 出して欲しいってか？ ハハハッ！」

煮えた白濁が杏樹とローゼの、惚けた表情やたわわな巨乳へと降り注ぐ。膣内の一本も矢継ぎ早に拍動し、初心で清らかな子宮へと穢れた陵辱液を吐き出す。

ビュクビュク！ ビュビュク、ビュク！ ビクビクビク！

強烈な性器臭に堪えきれず、嘔吐のため無意識に唇が広がった。そこにもペニスを捻り込まれ、獣の繁殖汁をぶちまけられる。

「あびゅっ、えお、げほおおおお……ッ！ えれえ、ひはっ、うおおえ……！」

精液と胃液が混ざった、得体の知れない液が巨乳へと垂れ落ちた。紺色のスクール水着も、蜘蛛の巣にでもかかったように白い粘糸にまみれている。

にもかかわらず、ジュエルの瞳は恍惚を浮かべていた。心ならずも肉体はキモチイイと



感じてしまい、結合部の上で剥き出しのクリトリスをひくひくさせる。

「はあ、あふ……なんなの、これえ？ おへえ」

生理的に飲みくたすことができない腐った味は、精液のものらしい。外道どもは少女をぐるりと取り囲み、排泄と変わらない調子で子種を捨てた。

「おおつ出る！ 出まくる！ チンポが壊れちまってとまんねえ！」

額や頬に浴びせられるのと同じ熱さが、お腹の中でも泳ぎまわっている。

やがて握り締めていた勃起から指を剥がし、杏樹は息を切らせた。

「はあっ、はあ、う……げほっ、うあ？」

視界が映画館へと戻り、それきり幻覚には惑わされなくなる。だからこそ、触手の精液を浴びせられた事実には現実感があつた。

エクスタシーからやつと降りてこられた頭が、状況を判断してしまう。子宮まで犯し尽くされ、女性の価値を貶められたのだ。自分のすべてが汚いものに思えるほどに。

「わ、私……いま、こいつに……あいつらに、あふっ！ はあ、んはあ……」

触手からは解放されたものの、セーラー戦士は着地もままならず、スクリーンの前で仰向けに倒れた。犯された悔しさと、純潔を取り戻せない無念さが、気高い気質の杏樹さえ涙ぐませる。秘裂から滲み出る精液は異様に生温かい。

脚の感覚はほとんどなく、開いていることに自覚はなかった。健康的な太腿が内側まで淫靡にぬめ光り、荒らされた事実を物語る。

ツインテールもぐちゃぐちゃで、降ろしているのと変わらない。

「どうだった？　ねえ、チンポマイスターにされた気分は」

そこへ本物のロゼツティⅡラッハシユタインが歩み寄ってきた。あの研究員たちと同等か、それ以上かもしれない酷薄な笑みを浮かべる。

「ローゼ……見ないで……」

杏樹は見られまいと我が身をかき抱いたが、かえって惨めな印象を強めてしまった。

ローゼの影が杏樹の頭上に差しかかり、狂気の瞳をぎらつかせる。

「これでアタシのこと、わかってくれたでしょ？　……大丈夫よ、あいつらはアタシが殺してやったわ。フフッ、最初にアタシを犯したヤツなんて、最期は傑作だったのよ」

もし彼らを殺す術を持っていたなら、杏樹でもローゼと同じことをしただろう。少女の頭と身体に手を加え、陵辱の遊び道具にするなど、絶対に許せなかった。

彼女の邪悪な表情が急に寂しげになる。

「だからね、あいつらのことはもういいの。それより、ね？　いいでしょ……そろそろアタシのこと、慰めてくれたって。んあ……アンジユウ」

そして薄汚れたジュエルを抱き締めるように寝そべり、唇を重ねてくる。

「ローゼ？　ンッ、んむう……」

意外なキスは数秒ほど続いた。無理強いのキスであっても乱暴さはなく、むしろ甘えてくるかのようだ。これが純真な愛情なのだとかかってしまうと、杏樹にとっても一時の慰

めとなり、拒絶することなどはしはしない。

ふたりの唇が離れ、濁った涎を引く。

「お願い、一緒にいて？ 絶対に離さないでね？ ……もうひとりにしないで」

ローゼは抱擁を深め、母親を見つけた迷子がすすり泣くように囁いた。異常なまでに情緒不安定で、杏樹という存在に極端に依存しているようである。

「……ローゼ……」

次元の歪みに一緒に取り残されていた時間だけでも、およそ一ヶ月だ。その間、杏樹にとつて唯一の支えがローゼだったのだから、ローゼの唯一の支えが杏樹であることは想像に難くない。離れ離れになったあとも、彼女は杏樹を追い求め続けたのだろう。

「ぎゅってしてよ、アンジュ？ 怖い……暗いとこ怖い、ずっと終わらないの」
彼女の歪みきって壊れた孤独感がひしひしと伝わってくる。

満身創痍の杏樹は残った力で右手を持ち上げ、ローゼの頭を撫でた。

「ごめんなさい、ローゼ……ごめんなさい」

謝っても謝っても、罪悪感から解放されることはない。

子どもっぽいローゼの泣き顔が、いつまで経っても甘えん坊の幼馴染を想起させる。香凛も遊びにいった先で迷子になっては、杏樹を見つけて抱きついてきたものだ。

あの子は無事だろうか。

ジュエルを庇って深手を負ったことまでしか、杏樹は知らない。

「……そうだわ、香凛！ はやく香凛のところに行かなきゃ」

杏樹はどうか起き上がり、ローゼに言い聞かせた。

「私、友達を放ったままなのよ。お願い！ すぐ戻ってくるから……ねえ、ローゼ？」

肩を揺すり、焦った調子で懇願する。だがローゼは頷いてくれなかった。

俯いただけの顔を覗き込むと、殺気立った悪魔の形相でぎろりと睨み返される。

「トモダチ？ ハッ、ふざけんじやないわよ！」

鋭い拳打が、無防備だったジュエルのみぞおちにめり込んだ。

「あうっ!? ぐ、はあ、ローゼ……いぎ、どうして？」

激痛のあまり杏樹は崩れ、べしゃつと突っ伏してしまふ。瞬く間に意識が薄れ、眠りに落ちそうになった。

（はやく香凛の……ところに戻らないと、いけないのに……）

変わり果てたローゼの高笑いは何重にも響き渡る。

「おかしなコトいうのね、アハハハ！ アンジュのトモダチはアタシだけ……アタシたちの仲は誰にも邪魔はさせないわ。そうでしょ？ ククッ、ククク、キャハハハハ！」

頭上ではコウモリが飛びまわり、赤い目を禍々しく光らせていた。

彼女の恥ずかしがる顔つきを舐めるように覗き込んで、快楽の荒波に溺れていく。

大胆な開脚のポーズを強いられながら、香凛は杏樹の舐めるような手つきに色悶えた。表情からは徐々に痛みが引くものの、つぶらな瞳が羞恥と快楽で涙ぐむ。

「んあっふう、も、もおやめて？ 杏ちゃん、んへああ？」

小柄なりに曲線のついた肉体は火照り、太腿など汗みずくだ。精液のせいでスクール水着はぬめりを帯び、異臭を放っている。にもかかわらず、杏樹の嗅覚は本能的に幼馴染の甘いおいを嗅ぎ分け、淫らな酔いに浸った。

ペニスの太さが膣の平常の狭さを上まわるため、苛烈に締めつけられる。

（すごいわ！ 香凛のヌルヌルがオチンチンにまとわりついて！）

煮えた粘膜がぬるりと絡みつく卑猥な感触も、性的興奮に拍車をかけた。鼓動のテンポが跳ね上がり、杏樹の頭に高熱を浮かせる。

「そんなに締めつけちゃ、香凛、ひあっはあ！ んあふあ！」

あれほど香凛を巻き込むまいと、傷つけまいとしていたのに、今はほかの誰でもない自分が彼女を傷つけていた。だが、始まってしまった衝動はもう抑えられない。

身を振ると、粘液まみれの紺色と白色のスクール水着が擦れあつた。挿入がほんの少しずれるだけで、お尻の上のあたりが痺れつく。脊髓に來ているようだ。

「香凛、私……はあっ！ これいいの、とまんない！」

「う、動いちゃや、ひへえあ？ えふう、杏ちゃん、やめへえ！」

杏樹は香凜のスクール水着にしがみつки、一心不乱に腰を動かし始めた。自分では止められないことを言い訳にして、幼馴染の処女穴を捲り返す。

グチュヌチュ、ヌチュヌチュヌチュ！

肉厚の傘がピストンに逆らって圧力を生じ、摩擦を強くした。腫れた亀頭にぬかるんだヒダヒダが群がり、しゃぶるように絡まってくる。

それとともに雁太を押し戻すと、締めつけが再びサオの根元まで届いた。たった一回のピストンで大腿筋が引き攣り、無意識に涎まで垂れてしまう。

「あんっ！ えあはあ、私、私、どんどん気持ちよくなつてくの！ 香凜のなかで！」

唇からは犬みたいに舌もはみ出て、はしたない。優等生であるはずの顔つきはみるみる締まりがなくなり、浅ましい心地よさを浮かべた。心ならずも瞳が蕩けていく。

「おく、おくにとどいへるう！ もうやめて、ひあつ、杏ちゃあん！」

ひつきりなしに喘ぐ香凜も、灼けた吐息の出し入れで頬を赤く染めていた。大勢の前で無理やり犯され、嫌がつているにしては、おねだりみたいな調子の声色だ。杏樹とともに打ち震えながら、熱い淫液で肉穴を潤す。

セックスで乳果を弾ませあうセーラー戦士たちから、女子はまた数歩あとずさった。

ただ女教師だけは歩み寄って淫行を制止しようとする。

「や、やめなさい、高峰さん！ こんな悪ふざけは……きやあ！」

ところが杏樹のお尻が暴れ、教員を弾き飛ばす。

「無理なんです、先生！ あはあ！ 私、こんなに気持ちいいの、あん、初めてで！」
目上の教師に対して丁寧語でありながら、杏樹はペニスの摩擦に耽った。パートナーのスクール水着を引っ掴んで、彼女の双乳を揺らすように突き込む。

「杏ちゃんっ！ へはあ、らめ、ああん！ そんなおくっ、ごりごりしちゃあ！」

香凛は開いた脚を引き攣らせ、杏樹の情熱的なピストンに悶絶していた。だんだん杏樹の強引なりズムに慣れ、側位なりに腰を返してくる。

生殖穴は濁った液を肉唇に絡ませ、美味しそうにペニスをしゃぶった。

グチャッ！ ヌチャ、グチャ！ グチュヌチャ、グチャ！

「えはあ、香凛のなか、っんふう！ ヌルヌルして、きっ、キツくって！」

杏樹の秘裂からも愛液が溢れ、スクール水着の股布に染み渡る。汗をかくほど精液臭は濃くなり、クラスメートは鼻を摘んだ。

「くっさ！ さっきからニオってるの、高峰さんたちじゃない」

「オシッコみたいなニオイよね、これ……うえっぶ」

同性ならではの嫌悪感がひしひしと伝わってくる。四方八方を軽蔑の目で囲まれ、逃げ場はない。にもかかわらず、杏樹の腰は遠慮も節操もなしに弾んだ。

（もっとオチンチン気持ちよくしないと、だめなの、どうにかなっちゃう！）

先端がむず痒くて、刺激を与え続けないことには狂おしい。香凛の太腿を抱えて下半身の密着を深め、肉壁の荒波を前後に泳ぐ。

女の羞恥と牝の快楽で熱がまわり、思考力も判断力も低下していた。間違っていることをしている自覚があっても、肉体の暴走を許してしまう。

「香凛、どう？ んあはっ、私のオチンチン、えへあ、ちゃんと感じてくれてる？」

「感じへ、なんて……えはあん！ もおゆるひ、ゆるしてえっ、杏ちゃん！ オチンチンされるのやなの、あひえあ！」

香凛もマゾヒスティックな嬌声を張り上げ、女学院の風紀から逸脱した。

さつきまで魔物と勇敢に戦っていたはずのユニゾンマイスターが、プールサイドで濃厚なレズプレイである。それも強制されたわけではなく、自ら望んでそうするかのように。

「はあっあ！ 香凛のなか、またキュッてしたわ！ すごい締まってく！」

セーラー戦士としても学院の生徒としても、立場がなかった。

杏樹自身、淫乱ぶりを自覚している。だが、これほど正直に、がむしやらなまでに香凛を求めることができて嬉しく、高揚感を抑えきれない。

（やらしい女の子って思われてるわ、絶対……でも、だけど！）

愛情はペニスの快感をいっそう味わい深く、甘く痺れるものにした。

「やめへえ！ いやっ、んあう！ おかさなけれ、ひぐ、ヘンになっひやうからあ！」

肉壁をかき混ぜられる香凛がしゃくりあげ、身を振って抵抗する。しかしボディラインを波打たせる悩ましい仕草は、杏樹を誘っているようでもある。

「ねえ、香凛ちゃんあんなに嫌がってるのに……これってレイプじゃないの？」

女子のひとりがユニゾンジュエルの乱暴を的確に指摘した。

だが、これがレイプであるはずがない。あの研究員たちがローゼを性便器として扱ったのとは違い、杏樹は香凜に想い焦がれているのだから。

「お願い香凜、っあはん、今だけでいいから……んはあ、私と一緒に！」

そして香凜の存在感だけが、空虚なローゼを忘れさせてくれた。ローゼがいなくなった心の空白を、香凜の温かさで埋め尽くす。

ズチュンッ！ ヌチュヌチュ、グチャヤ！ ズチャグチャヤ！

ユニゾンジュエルは腰にまとったセーラー服で舞うように、汗だくの肉体をくねらせた。のけぞることで巨乳の重さを腰に乗せ、肉棒を抜き挿しする。

「香凜も気持ちよくなって！ あへああ、香凜！ ひあっえああ！」

「だめえ！ 杏ちゃん、あんっ、きひやう！ アソコにすごい、えあふあ！」

香凜の肉穴は杏樹のペニスを迎え入れつつ狭まり、膣圧を苛烈にうねらせた。合わせ目から滲み出てくる液が濁って泡立つ。

同じ生理現象を杏樹の秘裂も起こしており、同性だからこそ、彼女の肉体も感じているのを読み取れた。セーラー戦士たちのスクール水着は股底がびしょびしょだ。

前のめりになった杏樹が、香凜の唇へと涎を垂らす。

「んはあっ、もう私、あなたのことしか……ンッ！ んあうぐう」

「杏ちゃ……ンう!! あむう、んぐっンンン！」

幼馴染の可憐な唇をキスで塞ぎ、舌をもつれあわせる。

ひとつの熱い喘ぎを共有しながら、お互いふたり分の唾液に溺れた。ぬちゃぬちゃと品のない粘音を立て、湿った吐息を混ぜ合わせる。

執拗なキスから逃れたがる香凛が、杏樹の上半身を押し返そうとした。ところがその手がスクール水着の肩紐を引っ張り、たわわな乳果をひん剥いてしまう。

「ふあっ？ 香凛、おっぱいだなんて、あふうう！ えはあ、そんなにされたら！」

さらに巨乳を持ち上げるように押し揉まれた。香汗と精液でべとつく柔乳に、香凛の小さなてのひらがむにゅうと食い込む。

疼いてならない先端を圧迫され、快感は肩へと突き抜けた。

「違うの、あふあ、あたし、杏ちゃんとかんなこと……ひはっああ！」

杏樹の涎が残った唇で「違う」と言いながら、香凛は膨らみから手を離さない。かぶりを振って、可愛いおさげを乱すほど悩乱する。

スクール水着から解放されたことで弾みやすくなった巨乳は、杏樹のダンスに反動と瞬発力を与えた。突き込む動きに加速がかかり、怒張は香凛の子宮に達する。

「もつとよ、香凛！ えあはっ！ オナニーよりすごい、はあ、すごすぎるの！」

刺激に揉まれながら、肉棒は熱い血潮を滾らせていた。股間へと込み上げる圧力のように感じられ、股関節まで痺れつく。

堪え性もなくピストンに耽る杏樹は、溶け落ちそうな表情に羞恥よりも快樂の度合いを

強く浮かべていた。香凜のマゾヒスティックな悦がり姿に見惚れ、舌なめずりまで。かといって衆人環視の恥ずかしさは断ち切れず、自分が野良犬みたいに思えてしまう。

「高峰さんって、クールでカッコイイって思ってたのに……気持ち悪い」

「アタマおかしいんじゃない？ 香凜ちゃんまで一緒になつてさ」

健全な授業中だった女子は、セーラー戦士の猥褻を辛らつになじつた。

学院のプールに乱入しての、人目を憚らないレズプレイだ。スクール水着の着用は、水抜き穴からペニスを生やすため、と思われているかもしれない。

呂律のまわらない調子で香凜も悶え狂い、スクール水着の股底を潤わせた。

「これいじよおされはら、っあん！ きちやう！ イクっていうのしちやうう！」

拒絶の訴えは弱々しく、快楽の熱い息遣いに紛れてばかり。涙ぐむ瞳は艶を秘め、眉も唇もだらしなく緩みきっている。

肉襞の群れは雁首を磨きつつ、敏感な亀頭を淫液で濡らした。角張ったエラでごりごりと擦り、穿り返すと、ただでさえ狭苦しい膣が強烈にうねる。

快楽神経を直に舐められる刺激の心地よさといやらしさが、強烈に射精を促す。

「私もっ、もう……んあはっ、だめ、いっちやう！ オチンチンでイクの！」

ペニスに電流が走り、俄かに高熱を生じ始めた。痺れのあとが無性にこそばゆく、すぐ次の反復運動に入らざるをえない。子宮へと押しつけた雁太を途中まで引き抜いては、せっかちな喘ぎとともに押し戻す。

ヌチャツズチャツ！ グチャヌチャ、ヌチュツ！ グチャチャツ！

濡れそぼった窄まりは剛直を効率的に摩擦し、愛液の卑猥な感触を根元まで行き渡らせた。溢れた分が音を立て、小さなしぶきを散らす。

「香凛、一緒に！ ああん！ 私ともつと……はあつ、はあはあ、うはあ！」

「アソコでイクウ！ やだ、えあは、杏ちゃん！ やめてっへ、いい、んへえあ！」

美少女戦士たちはパートナーを揉みくちやにしつつ、また揉みくちやにされながら、発情期の喘ぎをシンクロさせた。ジュエルの煌びやかなツインテールが波打つことで、淫乱な腰のリズムを皆にアピールしてしまう。

全身が脊髄そのものになったかのように快感に打たれ、痺れは脳にも達した。

（このまま香凛と……香凛さえいてくれたら！）

カラットの股座で暴れ、昂っていくジュエルの野蛮な有様に、もう誰も言葉を挟むことができな。カラットも犯されるには素直に脚を開き、浅ましいくらいに悦がる。

「あつあふあ！ 杏ちゃん、もつ、もおほんとに……あいついいい！」

ふたりともスクール水着を着ているのに、セーラー戦士として戦うのではなく、クラスの一員として授業を受けるでもなく、レズごっこ。

「こんなの、っはあ、クセになっちゃう！ んああつ、香凛！ わたし！」

性的興奮のみならず、荒れる羞恥さえベニスの血流量を増やし、汗みずくの肉体を敏感にした。自分のおさげに撫でられるだけでもぞくぞくする。

見られているはずが、見せびらかすような気分になって、バックスイングのたびに杏樹はお尻を振っていた。香凜という女の子を独占する優越感に歯止めが効かない。

ズブッ！ ズチャッ、又チャ！ グチャッ、又チャヌチャッ、ズチャッ！

昂る肉体は疲れなど知らず、ペニスへと込み上げる圧迫感をみるみる膨張させた。むず痒い亀頭にずぶ濡れのヒダヒダを絡め、快楽神経に悦痺れを与える。

「んふつああ、はあん！ 香凜っ、香凜！ 香凜のなかで私、あはああああ！」

悶え汗どころか涎まみれの巨乳を揉みしだかれながら、ジュエルは闇雲にスピードをあげた。白濁に近い女蜜を幼馴染の肉穴からかき出す。

香凜の喘ぎが息ぎれじみた発作となり、最後の一息で嬌声を張り上げた。

「杏ちゃん、あつああああ、イク！ イっひやうの！ オチンチンされしゅぎへ、おお、おかひぐ！ あへえああああああああ——ッ！」

いじらしい涙を溜めたベビーフェイスが、とろとろになってマゾの素顔を現す。酔いがまわったようにうっとりして、縮まらない唇の端で笑みを浮かべる。

「出るわ！ 出ちやうの、香凜にあふれちやう！」

絶頂収斂で勃起を食い締められ、杏樹はたまらず子宮孔へと直行した。股間で高まっていた熱量が爆ぜ、先端のとば口で圧迫感を解放する。

ドビュビュッ！ ビュルルッ、ビュクビュクビュク！

視界と脳裏の両方で真っ白な火花が散った。



砲撃が止まり、星魔砲から機械仕掛けのアームが伸びてくる。それによって捕獲されたのは、ぐったりとして動かない香凛だった。

ユニゾンカラットが魔導兵器の中枢へと吸い込まれていく。

「香凛！ 香凛を連れていかないで！」

グラウンドに残されたのは杏樹とローゼだけ。戦闘の前から消耗していたせいもあり、ジュエルの跳躍はまるで届かない。

墜落したジュエルは、悔しいほど無力な拳を地面に叩きつける。

「もっと力があれば……！ どうして！ どうしていつもこうなのよ、私は！」

「はあ、はあ……ごめん、アンジュ……アタシのせいで、カリンを……」
それきり星魔砲はすべての砲門を閉ざし、再び沈黙した。

☆

「しっかりしてください、香凛！」

クンツァイテの呼びかけに何回も意識を揺さぶられ、ようやく香凛は目を覚ます。

「……あたし？ クーちゃんは無事だったの？」

ローゼを庇ってレーザーに撃たれたあとの記憶がない。

ここは壁も天井も生き物の内臓みたいな器官で埋め尽くされた空間だった。足の下からドクンと不気味な脈動が感じられる。杏樹やローゼの姿は見当たらない。

「星魔砲の中に連れていかれたんです。はあっ……香凛、身体は痛みますか？」

クンツァイテの声は憔悴しきって、弱々しく掠れていた。昨日と今日だけで彼女も何回となく失神を繰り返しているはずだ。

「あたしは平気。ごめんね、ダメージ受けるのはクーちゃんなのに」

『いいえ、気にしないでください。それより今は状況を確認しましょう』

それでもクンツァイテが健在でいてくれることは心強い。無理させていることを申し訳なく思いつつ、香凛は慎重に周囲を見渡した。

「ねえクーちゃん、このセイマホウって何なの？ あたし、ローゼちゃんのお話だけじゃよくわかんなくて……」

『私やユーディエルは往昔に見たことがあるんです。無限座標の果てへと飛ばされたはずでしたが、帰ってくるとは……もしプログラムが昔のまま壊れているのなら、実世界へと転移し、大破壊をもたらすでしょう』

「壊れちゃってるの？ これ」

あれだけの砲門を持っているのだから、兵器であることは香凛にも理解できる。ならば実数空間へと転移される前に、これの動力を止めなければならなかった。

「杏ちゃんたちは無事かな？ どうかに攻撃をやめさせるレバーがあつたりして」

悠長に探索してもいられず、早く打開策が欲しい。

『いえ、待つてください。……もしや生体コアとは、異世界とのチャンネルを開き、星魔砲の転移をサポートするために組み込まれるのでは？ だとしたら、星魔砲が生体コアと

して欲するマイスターはチャネリングに卓越した……』

なんらかの事情を悟ったらしいクンツァイテが慌てて、香凜を急ぎたてる。

『どうということ？ クーちゃん』

『すぐに脱出しましょう！ あなたがここには危険です！』

だが、逃げ道を探す暇もなく触手がしゅるしゅると襲ってきた。純白のセーラー戦士を捕食するかのように四肢に巻きつき、びしょ濡れの太腿を這い上がってくる。

『きゃああっ！ 何これ？ やだ、気持ち悪い！』

ミミズを連想させる触手は、環節から粘液を滲ませていた。先端の形状は男性器に酷似しており、包皮の剥けたところに赤黒い亀頭が現れる。

過酷なレイプの経験は、少女に嫌でもこれからの陵辱を予感させた。人間と違って触手は表情を持たず、語ることもしないが、下品な意欲は伝わってくる。

『ち、ちよつと！ こないで……あう？』

スクール水着はマイスターの紋章を浮かべているものの、カラットに戦闘力はほとんど残っていないかった。そのうえ処女を散らされたばかりで、脚に力が入りきらない。

(……そおだ、あたし……杏ちゃんに犯されて)

幼馴染の杏樹に激しく求められたことも思い出し、自分の肉体が女性であること、そのための穴があることを実感する。

『だめです……自分の心を見失っては、ユニゾンが……』

クンツアイテの声は雑音に紛れ、聞こえなくなつた。彼女が力尽きただけでなく、香凜の感情に大きな乱れが生じたからだ。

「ひやあつ？　へんなどこ、っんはあ、ぬるぬるつてしないで！」

あられもない太腿を這い上がった右の一本が、スクール水着の健全な食い込みへと滑り込む。左の触手はくるぶしをしゃぶり、ニーソックスをくちやくちやくと咀嚼した。

ずぶ濡れの薄生地を形よく膨らませるお尻は、谷間を集中的になぞられる。せっかちな肉太はレッグホールからスクール水着へと潜り込み、股底を泳いだ。

「そつ、そこは！　……っえは、なんなの？　んあう、どうしてこんなこと……」

水抜き穴から一本、二本と触手が溢れ、ほかの仲間を導くようにうねる。

白色のスクール水着はじゅくじゅくに濡れそぼっており、おへその縦筋が透けていた。その上のセーラー服へも侵入するものが出始める。

ヌチャヌチャ！　ヌチュツ、ヌチュチュ！

裾と袖口から入り込んだ触手たちは、華奢な身体を締め上げつつ柔乳を狙った。実りのよい双子の膨らみに生温かい粘液を塗りたくる。

抵抗しようにも、相手が環形生物でしかも複数では、掴むくらいしかできない。

「だめ！　おっぱいも、ああつアソコも！　しちゃいや、んへああ！」

香凜は逃れたがつて誘惑的に腰をくねらせ、むしろ触手を招いてしまった。艶やかな太腿に数本ずつ巻かれ、身体を持ち上げられる。

しかも宙でひっくり返され、頭よりおさげが下になる。

レイプとはいえ絶頂を知ってしまったっている肉体は火照り、おぞましい感触を味わうように感度を高めていた。スクール水着の中で触手が股座をくぐり抜けると、思ってもいない喘ぎが唇から溢れてしまう。

「んあはっあ、うあ？ またカラダが……ン、んくうう！」

痛みで誤魔化そうとして唇を噛んでも、ほんの数秒で力が抜けた。眉もしおれたように傾いて、つぶらな瞳に涙が滲む。

触手の群れはユニゾンカラットを逆さに吊るし、セーラー服の中を荒らしまわった。スクール水着に透けた乳突起をぐにりと押し込んだり、胸の谷間をくぐったり。

「はあっ、だめ……あ？ や、やめてったら」

そのたびに香凛は肉体の疼きを堪えられず、吐息を色めかせる。

(こんなの……気持ち悪いはずなのに、あたし?)

花弁は蜜を滲ませ、再び熱く潤いつつあった。性の知識に疎い少女でも、これだけ繰り返されれば肉体の発情を自覚できる。濡れるほど疼き、疼くほど濡れてしまうのだ。

「放してっば、このお……ひはああ！」

続いてスクール水着の水抜き穴を捲られ、その発情ぶりを暴かれた。目のない触手たちが肉穴を覗き込み、先走り汁を食欲旺盛な涎みたいに垂らす。

逆さまの香凛は顔を赤らめ、鼻をすすった。

「み、見ちゃだめ……!!」

プールで大勢の同性にも観察された秘裂は、香凛にとって最大のコンプレックスだ。未だに性毛が生えなくて、幼い頃から見た目に成長がない。肉畝には厚みがあり、中央はまるで貝のように閉じ合わさっている。

だが、ここが開くのは知っていた。皆の前で杏樹に掂げられ、犯された時の感覚が鮮明に蘇ってくる。お腹を満たした膣内射精の燃えるような衝撃も。

「うっ？ あいつ、おなか……はあつ、これ、なんかいるよお！」

今日初めて正確な位置がわかった子宮で、圧迫感が膨張した。杏樹に注ぎ込まれた精液が何かしらの変異を始めたようだ。膣が子宮に圧迫され、秘裂から肉唇を押し出す。

花弁らしく綻んだ穴は自ら濡れ、ピンク色の粘膜をぬめ光らせた。

子宮から今度は鈍い痛みが込み上げ、美少女戦士のお腹を無理やり膨らませる。

「あぐううッ？ ひっ、ひああ！ どうなってるの？」

お腹はおへそを中心に膨れ上がり、さながら妊婦のような体型となった。

肥満によるものとは違って張りのある膨らみ方であり、幼い顔つきにありありと恐怖が浮かび上がる。スクール水着は限界まで薄く引き伸ばされ、生地越しても触手のうねりをほぼダイレクトに感覚できた。

産道が中から外に向かって拡がり、異物を産み出そうとし始める。

「い……いや、こんなの、お腹こわれ、ひぎいいいいい！」

さしものユニゾンマイスターも度を失って戦慄し、瞳を強張らせた。けれども宙吊りの肉体は辣み上がるどころか、触手の波と戯れ、熱くなるばかり。

しこって擦れやすくなった乳頭を弾かれると、全身を甘い痺れに襲われる。

(カラダがヘン、おなかも……アソコも！)

クリトリスも充血し、ピンピンに疼きを漲らせていた。そこに刺激がないと切ない喪失感が生じ、嫌悪していたはずの触手の動きさえもどかしい。

無意識に香凛は空腰を打ち、触手の波に飲まれながらぼて腹を揺らしていた。逆さまになつているせいで、子宮の重さが腰にずんとくる。

「んはあ、はあ……逃げなきや、えあう！ あぐ、なんとかひなきや」

セーラー服も重力の方向に捲れ、汚濁まみれのスクール水着は胸の位置まで露になつていた。今まで太腿へと垂れていた汁が、お腹を越えて双乳へと伝つてくる。

涎も鼻筋に沿って額へと流れ、唾液臭をおわせた。トレードマークのツイントールはぐちゃぐちゃであり、惨めに吊るされているのはユニゾンマイスターの紋章も虚しい。

お腹でドクンと何かが脈打ち、産道をこじ開けようとする。

「あいいぎ！ ま、待つへ、こんなの！ こわれるっ！ さけひやうよおお！」

肉体を内側から引き裂かれるような錯覚がした。

ところが、まったく予想になかった部分で別の陵辱が始まってしまふ。

ズブズブ、ズブズブズブッ！

スクール水着の中を泳ぎまわっていた触手が、少女の肛門へと亀頭を埋めたのだ。

「ひはっあああ？ やっ、だめ……オシリするのらめええええ！」

しかも一本ではなく、もう一本。

一本だけでも男根と同等の太さにもかかわらず、しなやかな関節構造が二本をドリル状に組み合わせ、窮屈な尻穴へと押し込んでいく。

すでにペニスを知ってしまったている肛門はめいっぱい拡がり、軽い火傷のようにひりついていた。少女本人のお便所穴が、チンポ触手のための肉便器となる。

「へはえええ、はあっ、んふああ！ 暴れないでっ、おお、おくまでめくれへ！」

触手は喜ぶように身を振りたくり、初心を装っているアナルへと刺激を送り込んだ。直腸が熱化し、美少女戦士の肉体を強制的に昂らせる。

瞳に涙を浮かべながら、香凛は発作的な高揚感に喘いだ。普通の女性なら身体が壊れる性拷問であつても、ユニゾンマイスターであれば耐えることができてしまう。

「おっぱいも……だめ、おしりも、んえああ、びりつてきちゃう！」

肛門拡張で疲れ果てて無抵抗のうちに、スクール水着は肩紐をずらされ、汗だくの柔乳が照り返った。苛烈なアナルファックがオタク男子たちの視線を思い出させる。

『カラットたんのおっぱいは可愛いなあ！ ぺろぺろしたい』

多感な香凛は燃え上がる羞恥で涙ぐむまで赤面した。

今までなら性的対象にされることと無関係でいられたが、これからは男性からの評価を

意識せざるを得ない。その評価基準は犯し甲斐があるかどうかだ。

クラスメートの声も聞こえてくる。

『あんな水着まで用意してさあ……コスプレでオタクとエンコーやってるらしいよ』
投げつけられた憶えのない辛らつな軽蔑が、少女の羞恥心を逆撫でする。

「ちが……あたし、そんなことなんかして、はあいぐ！ うぐうう！」

幻聴は星魔の思念のようでもあった。たった今カラットを陵辱している星魔砲が、香凛を追い込むための言葉を選び、発しているのだろう。

『僕たちのケツ便所だ！ 首輪も買ってあげなくちゃね』

触手は首にも巻きつき、逆さのユニゾンカラットを苦悶させた。

『うっわ！ あんなデブと、何あれ、お尻でやってんの？ 気持ち悪い！』

「してないよ、首輪もいらぬ……ひあつええ、あはあ！ あん！ えあふああ！」

耳障りな嘲笑に晒されながら、煮えたアナルを穿り返される。

又チャッ！ ブズブズグチャ！ グチャチャ！

二本の触手は抜き挿しのリズムをずらし、突きながら抜き、抜きながら突いた。窄まりがちな肛門を物理的な圧力で捲り返し、太めの環節をぬめらせる。

亀頭のエラは直腸の「中身」もかき混ぜているはずで、排泄欲が膨れ上がった。肝心の栓が勝手に動くため、我慢の仕様がなない。ひりひりの肛門を擦られまくる。

「でちゃうっ！ やめへえ、んあつああ！ れひゃうから、んぎっひいいい！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

3次元ドリームガゼン

偶数月 17日発売

95円

ニ次元ドリームガゼン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

3次元マジックファンレアル

奇数月 12日発売

コミックファンレアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

コミックプリズム

不定期発売

はやコミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

メガミクラインズ

奇数月 中旬発売

強く美しいヒロインが淫らに堕ちるアンソロジー!

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!